一人一人の力を引き出す題材と支援のあり方

Ⅰ　主題設定の理由

情報が入り乱れ，幾多の出来事に右往左往する現代社会において，じっくりと対象を見つめ，試行錯誤を繰り返しながら，自由に，またおもいのままに自分を表現することができる図工・美術教育のとりくみは，必要不可欠であると私達は考えている。

これまでも，しなやかな心や豊かな心情を育て，のびのびとした表現活動を展開していくための題材と支援に焦点をあて研究を進めてきた。その中で図工・美術教育の中の「鑑賞」の捉え方や，授業の持ち方が話題になり，実践例も紹介された。そこで一昨年度から二年間にわたり，「鑑賞」に視点を置き，鑑賞の授業のあり方・捉え方・考え方・あるいはその授業の進め方・鑑賞と表現のかかわりといった事について研究を進めてきた。その中で，子供たちの活動を見取る，教員側の「目」の大切さや，鑑賞からつながる表現への工夫など，さらなる課題も浮かび上がってきた。そこで，今年度は昨年度の研究成果をふまえ，鑑賞と表現の双方に視点を据えて研究協議し，あるいは実際に授業を参観し合う中で，「子どもたちの力を引き出す題材と支援はいかにあるべきか」のテーマに迫っていきたいと考えた。

Ⅱ　研究の内容

1　研究の進め方

・授業研究を実施し，授業のあり方を考える。
・実技研修を実施し，授業へ還元する。
・研究会会場を持ち回り，各校の学習環境や展示状況を参考にする。

2　実践研究

（1）小学校の実践から

・『わたしは○○ミノさん』

古屋　ゆか（東雲小２年）

東雲小2年生の教室に突如現れたミノムシ。そのミノムシとの生活からヒントを得て，表現に結びつけた題材であった。古屋先生の忍者を使った効果的な導入により，子どもたちは思い思いの材料や用具を使い，それぞれ個性的なミノムシに変身していた。授業の中でお互いに協力し合ったり，鑑賞しあったりすることが自然に出来ており，中にはダンスを振り付ける子どもたちも出てきて，大変楽しく，また素晴らしい授業であった。

・　県教研レポート

『『紙のマジシャン！』　　～折って，切って，開いて・・・組み合わせて～

青柳 仁美（大藤小３年）

１枚の紙を折って切るという単純な作業によってできる模様から広がる世界を、楽しみながら作り出す題材であった。仕上がった模様を「鑑賞」し，それらを生かして「表現する」という，鑑賞と表現の

つながり見ることができた授業で，子どもたちは自分の作品あるいは友達の活動を見て思い付き，どんどん制作を進めていた。意欲的に表現する子どもたちの姿があった。去年度から継続して研究しているが，対象となる子どもたちが替わっているので，その子どもたちに応じた新たな展開が見られ，大変興味深いレポートとなった。

（2）中学校の実践から

『不思議の国へ、ようこそ！！』

雨宮　智美（山梨北中1年）

モダンテクニックの一つであるスタンピングを発想のきっかけとして，自分なりのイメージやモチーフを見つけ，それぞれの『不思議の国』を表現する課題であった。「笑顔・笑声」カードや，スタンドアップタイム，板書，プリント，慎重に選択され配慮された言葉がけなど，随所に子どもたちの表現を引きだし，ふくらませるための工夫がみられた。子どもたちはそれに応えて，それぞれのおもいをもって生き生きと活動していた。制作を段階的に進め，技術的な面も含めたそれぞれの段階での適切な指導により，子どもたちは美術への苦手意識をなくし，心から表現活動を楽しんでいた。

Ⅲ　成果と課題

成果としては，小中合同で研究していることにより，図工から美術へのつながりという大きな視点を意識して研究できたことがまずあげられる。それにより，発達段階をふまえ，それぞれの段階でつけたい力をより明確にすることができた。授業研や県教研への取り組みはもちろん，各自が一実践を報告し討議することにより，部員全員が研究に関わることができ，テーマに沿った研究の深まりと広がりがみられ，毎回大変充実した研究会になった。また，昨年度から継続した取り組みをレポートした県教研では，全国研へ選出されるという成果をあげることができた。参加された先生方の活発な討議の様子からも，一貫したスタンスで研究を継続することの大切さが改めて感じられる。会場を持ち回りにすることも，各校の学習環境の工夫等を実際に見聞することが出来，参考になった。

課題としては，学校現場が多忙化の一途をたどる中，少ない人数の部会なので，思うように研究活動に時間がかけられない現実がある。また，来年度から教協の研究体制として，各部会の上限人数が決められる（図工・美術部会は15名）ため，これからも人数増は望めない。今後も充実した研究をしていくために，また，この部会で深まった内容を各校に還元し，図工・美術教育の大切さを伝えるために，何かしら方法を考えていかねばならない。また，上限人数を決め，所属出来る年数も限られるという研究体制が，教協全体の研究の深まりにつながるかどうかも，検証していく必要があると思われる。

授業実践については，成果にもあげたとおり，小中共に良く練られた素晴らしい実践を見せていただいた。討議内容も大変充実していて，まさに「一人一人の力を引き出す題材と支援のあり方」について，研究を深めることが出来た。今後の方向性については，課題にもあげているが，年2回の統一授業研の実施が難しくなっているため，授業の持ち方の工夫が必要になると思われる。また，表現メディアの多様化に対応するために，実技研修の重要性も高まっている。時間的な制約はあるが，部会研究の実践的な側面を強化する意味でも，実技研修の機会を増やす方向で考えていくべきと思われる。

（部長　小澤　朋子）